朝日・読売・毎日・中日新聞、NHK・日本テレビ などでも紹介

がん教育を「いのち」学ぶ場に！

「いのちの教育」
「がん・小児がん教育」
「副教材」を 無料で届けます
「講演」も承ります

小児がんを知り いのちの大切さを 学校で学ぼう!

～学校・地域で「いのちの授業」を開催ください～

★小児がんを題材にした「いのちの授業」の副教材を、全国の中学校などにお届けします。

★小児がんを発病した二人の少女の実話。
感動的、心に届く、誰にでも実践できるプログラム

★がん・いのちの教育向～道徳、保健集会、職員研修
＊授業時間５０分、教師・大学教授・医師・いのちの授業実践者等が編集
＊授業や研修向に、講演も承ります。

★副教材（授業指導案、冊子、授業事例ＤＶＤ）は無料！

冊子　A5×16頁　カラー

＜道徳での授業＞

＜保健集会での授業＞

＜講演での授業＞

■プロジェクトの思い

今、約16000人の子どもたちが小児がんと闘っています。闘病中、退院後も、周りの人の正しい理解や社会のサポートが必要です。小児がんの子どもたちにとって、学校は「生きる力」となる存在です。

一方で、学校では、いじめ・自殺など、いのちを粗末にするニュースが連日報道されています。

学校において、「がん・小児がんへの正しい理解」と「いのちの授業」が進むことを願い、副教材（授業指導案、冊子、授業事例ＤＶＤ）を制作してお届けします。また、授業や研修向に講演も承ります。

■副教材の概要、入手方法など

事務局公式サイトをご覧ください

NPO法人いのちをバトンタッチする会
〒450-0003
名古屋市中村区名駅南2-7-2
電話/FAX 052-581-8686
inochi-b@hm7.aitai.ne.jp
http://hm7.aitai.ne.jp/~inochi-b/

朝日新聞　2016.1.26

小児がん　亡き娘から学んで

体験語る父、中学生向け副教材

中学校で講演する鈴木中人さん＝NPO法人「いのちをバトンタッチする会」提供

小児がんで亡くなった娘の物語から病気を知り、命の大切さを学んでほしい。そう考えた名古屋市のNPO法人代表、鈴木中人さん(58)が、教育学者や医師らと小児がんの副教材づくりを進めている。4月から希望する全国の中学校に無料で配布する予定だ。

鈴木さんの長女、景子さんは3歳のときに発症して入院。1995年、6歳で亡くなった。6歳の誕生日に「せめて一度、花嫁姿を」と、母親が買ってきたウェディングドレスを着て記念撮影した写真が遺影となった。

景子さん＝鈴木中人さん提供

娘から託された「バトン」として命の大切さを伝えたいと、2007年にNPO法人「いのちをバトンタッチする会」を設立。学校や企業で千回以上、延べ約20万人に、自らの体験を講演してきた。

そんななか、文部科学省の有識者会議が昨年、学校で子どもががんを学び、健康と命の大切さを考えられる教育を、と提言した。「これまでは学校で命は語れても、死を思わせるがんを説明することは難しかった」と鈴木さん。がんを正面から扱う好機だと、教育学者や教育委員会の指導主事、医師、元校長らに協力を仰ぎ、冊子やDVDをつくり始めた。

テキストでは小児がんについて「毎年約2500人の子どもが発病」「70～80%は治る病気」と紹介し、景子さんとともに、病気を克服した子どもの話も掲載。命とは何かを問いかける構成にしたという。

「先生方にも家族を失った体験があるはず。命を大切に思う自身の心をのせて生徒に語りかけてほしい」と鈴木さん。道徳や保健体育、総合的な学習の時間で使ってもらいたいという。

副教材は冊子と指導案、DVDのセットで、いのちをバトンタッチする会と、小児がんの子どもを支援するNPO法人「ゴールドリボン・ネットワーク」の共同発行。2万セットを用意するほか、バトンタッチする会のサイトからもダウンロードできるようにする。問い合わせは同会(052・581・8686)へ。（氏岡真弓）

日本教育新聞　2016.3.7

「いのちの授業」通じ　小児がん理解

NPOが押谷・昭和女子大大学院教授らとプロジェクト

中学生向け副教材作成

「いのちの授業」を通して、命の大切さを実感させるとともに小児がんへの正しい理解を広めたい—。そんな願いから、特定非営利活動(NPO)法人いのちをバトンタッチする会代表の鈴木中人さんは、押谷由夫・昭和女子大学大学院教授など教育関係者や医療関係者とプロジェクトを立ち上げ、中学生向けの副教材を作成、4月から全国の中学校に無料で配布する。冊子と授業指導案、DVDで構成し、学校で授業をしながら内容を練り上げているところだ。道徳が「特別な教科」になる中、貴重な教材となりそうだ。副教材の内容と2月に愛知県小牧市立北里中学校（舟橋孝司校長）で行われた授業の様子を紹介する。

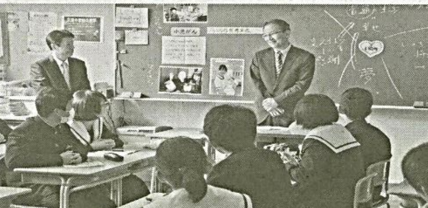
鈴木さんは、娘の景子さんが小児がんを患い6歳で亡くなった経験を踏まえて、これまで命をテーマに講演や授業をしてきた。この取り組みや法人を立ち上げた経緯は書籍「6歳のお嫁さん　亡き娘から託された『いのちの授業』」（実業之日本社）に、景子さんと過ごした日々は絵本「6さいのおよめさん」（文屋）＝写真左＝にまとめている。

今回の副教材は、小児がんから命を考える内容で、亡くなった「ケイコちゃん」と、がんが治った「マイさん」の物語を伝えながら、がんの正しい知識も学べるようにしている。

◇

愛知・小牧市立北里中の道徳

「亡くなった少女」「回復した体験」2人の人生から命の尊さ見詰め



娘を小児がんで亡くした経験から命の尊さを語る鈴木さん（中央右）

北里中学校では、道徳の時間にプロジェクトメンバーの玉置崇・岐阜聖徳学園大学教授と山田貞二・愛知県教委義務教育課指導主事が登壇。2人とも昨年度まで愛知県の公立中学校で校長をしていた。初対面の生徒との溝を埋め、教材のメッセージが伝わるように、授業開始前から笑いを引き出し、本題に入っていった。同校は学び合いの授業に力を注いでおり、机の配置も工夫。道徳もグループで随時議論をしながら進めた。

1年3組で授業をしたのは玉置教授。最初に薬の影響で髪の毛が抜け落ちた病院での「ケイコちゃん」の写真を掲示。ケイコちゃんが置かれた状況を考えさせるところから始めた。その後、日本でのがんや小児がんの発症率などを考えさせ、身近な病気であることや、小児がんの7割から8割は治る、周囲の理解やサポートが欠かせない—ことなどを伝えた。

ここで物語に戻り、ケイコちゃんはお嫁さんが大好きで、あと数カ月の命と知りながら、看護師さんの結婚式で「きれいだね。わたしも早く、お嫁さんになりたい」と語ったことや、学校の宿題に熱心に取り組んだことなどを朗読。体調が徐々に悪化していたため、ノートを押さえることもできず、お父さんは、「もう頑張らなくていい」と思いながら見守ったという。亡くなった後は、ケイコちゃんに白いドレスを着させ、大好きだったお嫁さんの姿にして送り出した。

次に紹介したのは、小児がんになり、小学6年生から中学2年生まで治療に専念した「マイさん」の物語。中学時代の七夕の願いは「世界中から病気がなくなる」こと。治療の影響で足の骨の一部が壊死するなど苦しくつらい日々を過ごしたが、多くの人の支えを受け、回復した後、大学の看護学科に進み、看護師を目指している。夢は「難病と闘う子どもの役に立つこと」で、現在の元気な姿を張り出した。

2人の人生に触れた上で、自分自身は何を大切にしたいと感じたか、「いのち」とは何か、などを考えさせた。生徒からは「毎日学校に来られ、健康でいられることは当たり前だと思っていたが、そうではないと知り、毎日を大切にし、充実させたいと思った」などの感想が寄せられた。この回答に玉置教授は「当たり前のことを大切にし、日々の生活を充実させるとはどういうことか」と尋ね、考えをさらに深められるようにした。「聞き心地の良い、美しい言葉でこの副教材からの学びを終わらせてはならない」と考えたためだ。生徒とのやりとりでは「命は一瞬でなくなることがある。命は弱いものであると感じた」といった発言があり、玉置教授は副教材に掲載された「いのちのメッセージ」を読み上げた。

山田指導主事は2年2組で授業を実施。生徒からの感想では、1年生と同様に「当たり前だと思っていた生活は当たり前ではないと気付き大事にしていきたい」といったものが挙がった他、他者への感謝の気持ちや、命を人のために役立てる尊さ—などが語られた。中には、「自分は大きな障害がなく生まれて幸せだと感じた」という意見も。そこで山田指導主事は、「それでは、ケイコちゃんやマイさんは幸せだったのか」と問い、生徒同士で議論させた。

◇

どちらの授業も、「最後に皆さんに紹介したい人がいます。それは、ケイコちゃんのお父さんです」と鈴木さんを紹介。鈴木さんは、「私も景子が幸せだったか、また、私は幸せにできたのか、ずっと考えていました。でも、景子はきっとこんなことを皆さんに伝えたいのだと思います。私は6年しか生きられなかったけれど、大好きな大好きな学校に行けて、友達や先生に会えて、幸せだった。命はとても大切。どんなことがあっても、お父さんやお母さんより早く死んではいけないよ」と語り掛けた。

副教材は希望者に無料で配布する他、4月までに同会ホームページからダウンロードできるようにする。

問い合わせ＝同会の電子メール inochi-b@hm7.aitai.ne.jp

日本教育新聞	「いのちの授業通じ　小児がん理解」
教育家庭新聞	「小児がんから"いのち"を学ぶ」
毎日新聞	「娘の死　命の授業に」
NHK	「小児がんテーマにいのちの授業」
朝日新聞	「小児がん　亡き娘から学んで」
読売新聞	「亡き娘を通じて伝えるがん」
中日新聞	「がん教育を『いのち』学ぶ場に」
日本テレビ	「小児がんで娘を亡くした父　いのちの授業」